

令和 4 年 10 月 14 日

## 若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 202080285  
氏名 村木 数鷹

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。  
なお、下記記載の内容については相違ありません。

### 記

1. 派遣先：都市名 ローマ (国名 イタリア)
2. 研究課題名（和文）：マキアヴェッリの政治思想と歴史叙述——都市フィレンツェとの関係を中心として——
3. 派遣期間：令和 3 年 9 月 1 日 ~ 令和 4 年 8 月 30 日 (364 日間)
4. 派遣先機関名・部局名：ローマ第三大学
5. 派遣先機関で従事した研究内容と研究状況（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

本プログラムにおいては、マキアヴェッリの政治思想と歴史叙述の関係についての考察を深めるべく、主にヨーロッパ、或いはイタリア現地でのみ遂行可能な研究活動を重点的に進めることを意識した。第一に、ローマに点在する数々の図書館や文書館に加えて、同期間にローマ第三大学と合わせて滞在していたピサ高等師範学校（*Scuola Normale Superiore di Pisa*）の図書館、更にはフィレンツェの文書館なども利用することを通じて、マキアヴェッリの自筆草稿をはじめとする貴重な一次文献や、日本での入手が難しいイタリア語の二次文献の調査および読解を進めることができた。このことは、とりわけテキストの帰属について議論のある『ペスト書簡』に関する論文を執筆する際に大いに役立った。

第二に、世界のマキアヴェッリ研究における第一人者として現在、広く認められる受入研究者であるローマ第三大学の *Gabriele Pedullà* 教授と自身の研究計画やその構想について、数多くの議論を重ねた。加えて、歴史学や哲学、更には文学といった自身の日本での専攻である政治学とはやや異なる分野のイタリア人研究者と、様々な論点について日常的に意見を交換する機会を得た。とりわけ歴史学分野の知見を直接に見聞できたことは、自身の「歴史叙述」に焦点を当てた研究計画にとって、貴重な幾つかの示唆を与えてくれた。

第三に、ヨーロッパに滞在していたことも活かして、ダブリンで開催された *Renaissance Society of America Annual Meeting* において自身の研究報告を行なった。この報告については、上記に記したような交流に基づいて形成された人脈を通じて、2022 年中に英語論文として *Rivista di letteratura storiografica italiana* 誌上に掲載される予定である。

## 6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

在外研究中に得られた研究上の発見に依拠して、帰国後は2023年の9月末までを目処として博士論文の執筆に専念する予定である。その中間報告として、2023年2月25日の「近代思想研究会」の例会において口頭発表を行うことも既に決定している。

また、受入研究者である Gabriele Pedullà 教授が中心的な役割を果たしながら企画立案が進められている International Machiavelli Society の第1回設立記念シンポジウムが2023年中にローマにて開催される見込みである(これまで新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う延期が相次いでおり、詳細な日程は現在のところ未定)。そこで自身の博士論文における中核的な研究成果を、マキャヴェッリ研究という領域では極めて大きな意味を持つ国際的な会合の場で発表する予定である(イタリア語による口頭報告)。

加えて、受入研究者との間に当該派遣期間中に築かれた信頼関係に基づいて、イタリアの学術誌上に幾つかの書評や論文を掲載する計画も進行中である。とりわけ、彼が監修した最新ヴァージョンの『君主論』に対する書評論文という形で、自身の研究成果のうち特に『君主論』に関係する考察を部分的に示す予定である(イタリア語での公刊を予定)。

今後の研究計画の方向性としては、博士論文の執筆に続いて「リアリズム」に関する研究を進めることを検討している。政治学の領域において長くマキャヴェッリの名前が「リアリズム」と関連づけられてきたことは広く知られているが、マキャヴェッリの「現実」に対する距離感、或いはこれに対する忠実さについては、彼の歴史叙述や文学作品を閲してみると、これまで考えられてきたほどには単純なものではないことが明らかになった。今回のプログラムで深めたマキャヴェッリの政治思想と歴史叙述との関係に対する知見も活かしながら、時代や地域も広げつつ「リアリズム」と一般に呼称されてきた思想的な伝統について独創的な再検討を試みたい。

## 7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

まず全体として、今回のイタリアでの1年間に及んだ在外研究は、派遣者の認識や視座を広げるうえで大変に貴重な機会となった。派遣者にとって初めての海外生活は、奇しくも疫病と戦争の時代と重なることになった。そうした危機にあるヨーロッパ世界を間近から見聞できたことは、何よりもかけがえのない経験であった。

また、コロナ禍に苦しむ日本にあって、派遣前はどうしても国内の社会状況を相対化することが容易ではなかったものの、イタリアに渡航した後には外から客観的に日本の姿を眺めることができるようになったことも、大変に貴重な変化であったと言えよう。

加えて、受入研究者の Gabriele Pedullà 教授との間に築かれた関係性は、研究者同士のものを越えて、個人間の非常に深いものとなった。とりわけ、夏期休暇中に彼の私邸を訪れ、そこで三食を共にしながら共同生活を送った数日間は、研究上の議論を交わせた点に留まらず、イタリアにおける知識人コミュニティのあり方を直接に見聞することができたという点でも、現地に赴いたからこそ得られた経験であった。

最後に、自身の研究者としての限界や未熟さを認識する機会を得たことにも触れておきたい。これまでの全人生を通じて、同一の大学の、同一の学部・研究科において、そして同一の言語を用いて研究活動を進めてきた派遣者にとって、イタリア語という外国語を用いて、歴史学という従来の専門からは少し離れた機関に所属しながら、そして教育システムの大きく異なる空間で過ごした一年は、これまで習慣化されてきた振舞いが通用せず、常に新たな評価軸の上で自らを表現し直すことを余儀なくされる時間であった。それは、自身の人間としての幅を広げる上でも、更にはこれまでの生育環境を相対化するうえでも、大変に貴重な経験であったように思う。